

パストラルハープ Vol.4

ハープボランティアとして病院に受け入れていただいてから、気がつけば5年近くが経とうとしています。毎回4人の患者様のベッドサイドを訪問させていただくのですが、終末期を迎え、言葉によるコミュニケーションが難しいと思われる方がほとんどです。今回は、会話を交わすことのできた(といっても短い会話ですが)貴重な(?)経験をお分かちさせていただければと思います。

その患者様は長く幼児教育に携わってこられたシスターでした。お部屋に入ると、とぎれとぎれにロザリオの祈りをささげる声がします。ご挨拶をしてハープを弾き始めると、しばらくは目を閉じ苦しそうに喘いでおられましたが、やがて少し呼吸がゆっくりになりました。しばらくすると、かすかに目を開けられ、「ああ、うれしい」とかすれた声でおっしゃいました。私はハープの手を止め、「シスターは、これまで大事なお働きをたくさん担ってこられたのでしょうか」と尋ねてみました。すると彼女は目を閉じ、じっと長い間考えておられ、再び目を開けると、「よくできたかどうか、わからないの…。一生懸命、やったけれど…。それがどうだったのかはわからない…。どうだったか…。」と、内面を見つめるような表情でおっしゃいました。

この言葉は、単なる謙遜の言葉などではなくて、ご自分の生涯を真剣に振り返り、神の大きな恵みに自分が十分に応えることができたかどうか、いや、できなかったのではなかったのか、という恐れや不安、苦悩が、そのまま表出したのだと、私には思えました。その時のシスターの言葉と表情は、私の中に強い印象を残しました。私もまた最後の時に同じ問いを発することになるのでしょうか、最後の時ではなく、今こそ、その問いを自分に向けなければ、せっかくシスターが残してくれた言葉を無駄にしてしまうことになるのではないかと。「一生懸命やったけど、それがうまくできたかどうかは、わからない」という言葉は、単に、物事を達成できたか、成果をあげられたか、ということではなく、神に造られた私自身として十全に生きているか、神が私に備えてくださった賜物の全てをしっかりと開花させて物事に取り組んでいるか、という意味をもっていると私には思えたのです。神の恵みの数々に気づかずに(気づいていても?)放置している自分自身があります。にもかかわらず、恵みは畑の中に隠された宝のように(マタイ福音書13章)、今も、私たちの中にある。だから、ちゃんと見つけ出し、掘り出して、大切に、しっかり活かさないという聖書のみ言葉と、あのシスターの最後の言葉が、私を励まし、日々の働きへと押し出してくれています。